創生

目次

《冬》第三十七巻第四号通巻百四十八号

新年のごあいさつ……山口　美智　2
令和丙午年新年互礼会……3
嘶馬集「松手入」……山口　美智　6
「風爽か」……屋内　修一　8
「玉音」……石井　九峰　9
「長き夜」……菅　風花　10
「こだはりは」……米田由美子　11
虹座……宮地　瑞穂他　12
百花漫歩（嘶馬集・虹座欄　鑑賞）
……矢城　小童　20
詠花吟月「冬どなり」……豊川　操　21
「望の月」……山本　清司　21
七夕……渡邉せろり他　22
共鳴句（七夕欄）……山口　美智　30
花菜……井野　勝洋他　31
共鳴句（花菜欄）……山口　美智　41
秋号鑑賞（嘶馬集）……水田　満里　42
秋号鑑賞（虹座欄）……上甫木はるひ　43
秋号鑑賞（七夕欄）……平野　幸輝　44
秋号鑑賞（花菜欄）……岡田　玲子　45
添削教室……松本　直美　46
第148回課題句（芒）……平野　幸輝　47
私の好きな冬の季語…西井　一狼　50
をちこち……山根可寿志　50
支部だより……中村　智子　51
太田川例会秀句評……山口　美智他　52

表紙　①松野自得
元日の人平らけくやすらけく
②馬洗俳句
③お知らせ
④阿響・課題句募集
野間しげる

カット

新年のごあいさつ

創生俳句会代表　山口美智

新春のお慶びを申し上げます。

会員の皆さまに支えられ、昨年も充実した一年を送ることができました。

昨年の創生大会では、一〇一歳の野坂辰夫さんが高成績を収められたり、多彩な方々が特技を披露してくださったり、今までにも増して楽しい大会で、改めて創生の絆の強さを感じることができました。

高齢化が進み、病気などで退会される方が多く心配されましたが、それぞれの句会が俳句体験会やロビー展などを自主的に開いてくれているお蔭で、新しく多くの仲間ができました。

また、遠方の方も学びやすいように、通信でも句会に参加できる「こくりこ句会」が新しく発足し、書道教室の仲間の「十日市句会」「あとりえしおん句会」も活動を始めています。

「年々歳々花相似たり歳々年々人同じからず」という諺があります。

一年の計を立て、新しさと個性の開花を心がけ、納得のいく作品を全力で作ってください。

今年も楽しく充実した一年にしていきましょう。

令和八年一月一日

松手入

山口美智

生業を忘れ漁師の松手入

自転車が塞ぎたる路地冬休み

数へ日の少し気の張る手紙かな

子に残す荒ぶる田畑年の暮

火薬庫の発火するごと寒夕焼

病む夫のやすけき寝顔今朝の春

初社一段ごとに厄落とし

桐箱にふたたび眠る雑煮椀

風爽か

屋内修一

秋暑し門の仁王も眉根寄す

句座通ひ楽しと破顔生身魂

受胎告知か臀呫のとんぼ水叩く

朝顔や伊予青石に波郷の句

保津峡をトロッコ列車風爽か

添水鳴る堂の詩仙の慰みに

刻まれし藁屑匂ふ苅田道

玉音

石井九峰

夕焼の砂場や忘れ三輪車

左折せるバスの車窓や大西日

空蟬の六肢に羽化の力みかな

玉音より八十年や日の盛

門火焚く通りすがりの子も寄り来

コーラスは性に合わぬと法師蟬

ここからは山姥んちや芒原

長き夜

菅　風花

三滝寺の梵鐘一打原爆忌
髪きゆつと結ぶ指先秋立てり
すれ違ふ心ひぐらし鳴き初むる
病む猫の寝息確かむ長き夜
芒野に遊び幼き吾と会ふ
あさがほの今朝開ききる藍深し
秋うらら呼べば応ふる猫とゐて

こだはりは

米田　由美子

ひあはひの風に魚干し水着干し

目のあたりが母似ですねと盆の僧

こだはりは在来種てふ新豆腐

塩壺を取れば秋の蚊その陰に

一塊の闇となる森いなびかり

補聴器をはづしてよりの夜長なる

枯れきつて蟷螂草に成り済ます

虹座

――同人・五十音順送り――

山口　美智　選

師の墓所へ優しき蔭や青楓
合掌して涙の滲む広島忌

宮地瑞穂　瀬戸田

瓶の牛乳噛みて味はふ今朝の秋
西行の生涯を知る秋灯下
秋涼や俳誌束ぬる十年分

守田高生　太田川

父の日や寡黙を見舞ふ寡黙の子
そよ風や植田ほほ笑むほどに揺れ
米農家の腕に膏薬半夏生
初なりの尻を地に着け大なすび
生皮を剥ぐごと脱ぎぬ汗のシャツ

山口ひろ女　太田川

今も走る被爆電車や日の盛
蜩や金色堂をあとにして
水澄むや不意に蕎麦打つ話など
もう八十未だ八十と敬老日
稲の秋古里の色溢れさせ

山崎華園　太田川

一雨に木々のまぶしき夏来る
五月雨に煙れる兄の一周忌
イタリアで一度使ひしサングラス
仏壇に遺骨の小指終戦日
流星や窓辺の椅子に開く本

荒木正夫　宗像

❄「虹よ虹」登校の子の声弾け
山間の棚田千枚みな刈田
羊ヶ丘のクラーク像や鰯雲
山寺へ向かふ石段秋の声
秋高し木箱へ入るる入山料

荒木洋子　宗像

声上げて走つて跳んで水着の子
子の宝スーパーカーと兜虫
門閉ざす修道院や花カンナ
堤防に残るぬくもり流れ星
野分晴天空高く白き月

池田萩邨　倉掛

七夕や平和の文字の多き街
秋出水引きて流木あらはなり
清福の日々の曜秋日和
子らの足つくづく長し運動会
これがまあ蝶になるのか菜虫取り

石川豊子　舟入

梅雨晴間囲碁を楽しむ夫のゐて
朝顔の青がいちめん広ごりぬ
淋しさをまた引きよする秋の声
亡き友の声ひびくごと芒原
赤い羽根電車の中で目立ちをり

稲田千春　瀬戸田

長き夜をスマホ相手に過ごす日も
❄秋刀魚焼き庶民の味を取り戻し
新涼や夫の遺影も安堵顔
嘻嘻として影踏み遊ぶ良夜かな
ミステリー読んで眠れぬ夜長かな

七夕

―同人―

十二席以下は五十音順送り

山口　美智　選

教へ子の教師となりて竹の春　渡邉　せろり　宗像

甲高き訛に戻る冷し酒

蜩やベッドの母の腕に数珠

廃坑の解体工事秋暑し

病室の風呂敷包月青し

終便の船に浴衣の女かな　世良　みか子　大柿

終戦日帰還の父のアルミ匙

峰雲や揃ひの演武服は赤

ロボットが手を振る駅や赤とんぼ

耳に飛び込む点滴の音寒の月

夏めくや母のスカーフ軽やかに　吉村　千恵　太田川

父の日や輝く瞳に会ひに行く

沙羅の花サックス響く仏式婚

冷し酒とろみをつけて父の盃

霧深き里へ里へと走る夜

鮎泳ぐ己の影を水底に　野坂辰夫　出江

宙を切る赤子の力夏布団

牽牛花電車引き込む新駅舎

息止めて体重で切る熟南瓜

新涼や木の葉木の間の空の色

新涼や朝の厨へ風入るる　三谷弘子　八幡川

里神楽荒息見せず舞ひ納む

観覧車ゆるりと廻り秋高し

戸締りに亡き夫思ふ虫時雨

冬瓜のみどり優しき椀の中

夏期講座タンクトップの女学生　山本清司　倉掛

登校子と交すあいさつ朝涼し

かつたるい男の昼寝句読点

地球儀の国の名ふるし今朝の秋

芒野に溶けゆく妻や夕日影

拘りはほど良き重さ夏布団　西美津子　福寿草

勝手口訪ふ親しさの切西瓜

廃屋にゆるき傾き草の花

モチーフに柿一枝を貰ひけり

秋刀魚焼く母の齢を疾うに過ぎ

棒手振の江戸の噺で暑気払　吉岡而今　蟬しぐれ

表具屋のおやぢ一徹夜なべかな

酸つぱさをしみじみねぶる濁り酒

身に入むや乙女峠の三尺牢

坂の町秋蝶二頭浅葱色

ビオトープを覗き込む子らひきの声　本藤さゆり　木もれび

空港に髭剃る男夏深し

乙女らに同じ命日広島忌

十階の嵌め殺し窓鳥渡る

母と分かつフルーツパフェや盆休み

シルバーに遊ばれている草刈機　矢城小童　倉掛

モナリザにミロのヴィーナス館涼し

熱帯夜床の南北変へてみる

座布団の山を整へ盆用意

仏飯に添ふる一言今年米

更衣肩書き下ろし空ひろし　國領隆男　倉掛

終ふ墓の戒名隠す苔の花

かき氷女店主の力こぶ

風の辻行方思案の赤とんぼ

宿浴衣外湯巡りの下駄の音

共鳴句（七夕欄）

山口　美智

甲高き訛に戻る冷し酒　　渡邉せろり

気の置けない仲間と、楽しくお酒を飲んでいる光景が目に浮かぶ。酒が回ると声は大きく甲高くなり、言葉のはしばしに訛が出てくる。故郷は誰もが持つ心の拠り所であり、生きていく上でも、大きな意味を持つ場所だからであろう。

終戦日帰還の父のアルミ匙　　世良みか子

帰還してきた父親が持ち帰った一本のアルミの匙を、作者は今でも大切に持っている。その小さな匙は、父親が生きてきた証であり、見ていると安らぎを感じるのであろう。

冷し酒とろみをつけて父の盃　　吉村　千恵

お盆に子ども達が集まった食事の席に、長期療養の父親も加わった。年老いた父親には誤嚥を防ぐために、お酒に少しとろみをつけたのだ。父を思う優しい気持ちが伝わってくる。

息止めて体重で切る熟南瓜　　野坂　辰夫

何気ない日常生活の中の一瞬をとらえて一句に仕立てた作品。掲句は的確な表現力で、見た光景をありのままに素直に描写し生き生きとした作品になっている。

戸締りに亡き夫思ふ虫時雨　　三谷　弘子

夫の死は頭では分かっていても、なかなか受け入れられないものである。夕方、戸締りをしているときに「ただいま」と言って、夫が帰ってくる錯覚に陥ることがあるのだろう。

夏期講座タンクトップの女学生　　山本　清司

シンプルで清潔な感じの服装で、夏期講座に出席していた少女が、ある日、タンクトップ姿で教室に入ってきたのだ。目のやり場に困っている作者の顔が浮んでくる。

勝手口訪ふ親しさの切西瓜　　西　美津子

醤油や味噌を貸し借りしたり、留守中の洗濯ものを取り入れてあげたりと、隣近所と親しく、家族同然の付き合いをしていた昔を懐かしく思い出した。

身に入むや乙女峠の三尺牢　　吉岡　而今

明治政府による隠れキリシタン弾圧で、日本各地に送られたキリスタン。中国地方では、津和野に百五十三名の信者が送られて来た。縦、横、高さが三尺ほどの身動きできない三尺牢に閉じ込められるという、厳しさにおかれた殉教者たちの、苦難の痕跡を消してはならないと、改めて思ったことであろう。

乙女らに同じ命日広島忌　　本藤さゆり

原爆の効果を最大限に引き出すために選ばれた、八時十五分という投下時間。建物疎開の作業中だった多くの女学生が被爆死した。広島の苦難の歴史は絶対に忘れませんと、慰霊碑に作者は誓ったのだ。

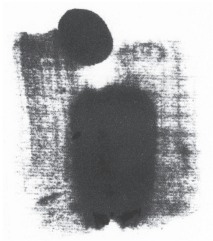
熱帯夜床の南北変へてみる　　矢城　小童

日本では「北枕」が連想され縁起が悪いと言って、北向きに寝ることを嫌う。そんなことは言っておられないほどの、今年の夏の暑さである。作者は床の向きを変えてみたのだ。

花菜

十三席以下は五十音順送り

山口　美智　選



落人の椎葉の里に舞ふ蛍　井野勝洋　御戸森

指に来て斧振りかざす子蟷螂

初蟬や夜来の雨の過ぎし朝

盆とんぼいづれに母の乗りたまふ

連獅子の毛振りのさまや芒舞ふ

ときめきも時にはありぬ更衣　隠木登美子　舟入

葉桜のはだら眩しき午後の道

一管の貫く響き夏祭

朝顔の色濃かりけりよべの雨

山里に白き風生む蕎麦の花

余生なほ夢はありますうつし花　濱本美紀恵　倉掛

狛犬の阿吽を洩るる若葉光

ぷちぷちと煮ゆるジャムなり春時雨

和菓子屋の暖簾くぐりて秋と会ふ

絵手紙の余白の重み半夏生

いちどきに山鳥鳴くや梅雨明くる　石嶋みつ子　木もれび

初瓜のうすみどり透くガラス鉢

夏草に教はる風の通り道

精霊舟父の最後のバスが出る

海の家解かれて波の静かなり

❄広島忌二十五言語の「はだしのゲン」
灯台を守りて逝くや敗戦忌
流星や天文学者の願ひ事
秋めくやヘナを待つ間のワインティー
花野みち片手に山の花カード

瀬戸内かんな　こくりこ

朝の縁足先だけの日向ぼこ
花過ぎていつもの顔の遊歩道
猛き根を晒し微笑むヒヤシンス
❄いつもより濃い紅をさし牡丹園
膝立ちのサップを戯る四方卯波

廣津敦子　八幡川

秋場所や異人力士の厚き胸
騎馬戦に勝つて雄叫び天高し
秋彼岸心経詠める大方丈
八十路翁農機運転秋耕す
❄熱燗やいつもの四人指定席

橋本収三　こくりこ

コロッケの売切ご免暮早し
❄極月の達磨未だに片目なり
ちぎり絵のごと山茶花の啄まれ
回天のスクリュー音か虎落笛
屋台カフェの客は湯気越し寒北斗

櫻田文雄　八幡川

ローカル線水満々の植田行く
鈴蘭の白き小玉をゆらす風
紅薔薇の色香に惹かれ訪ねけり
闇待てば蛍息づく葉陰かな
❄夾竹桃供花のごとく咲きにけり

山根可寿志　御戸森

みづからを奮ひ立たせて葉鶏頭
つぎつぎに蟬の鳴く朝鳥も鳴く
❄はやばやと笑顔の集ふ敬老日
初めてのガチャガチャ回し夏の宿
小燕の口がひしめく無人駅

森藤日出美　倉掛

崩れたる生家の土塀秋の蝶
❄かなかなの声を背に受け宿題す
散策の城の水辺や今朝の秋
秋の空少し遠くへ一人旅
潜水橋より川面を眺む秋遍路

島知子　太田川

今日こそと本を積み上げまた昼寝
鉄人に負けぬ飛行やてんと虫
❄流灯に安穏と書き押しやる手
秋めきてやつと出かくる老夫婦
風の音すすきの揺るる波高し

藤井幸男　舟入

共鳴句（花菜欄）

山口　美智

盆とんぼいづれに母の乗りたまふ　井野　勝洋

盆とんぼとは、多くの地方では「精霊トンボ」と呼ばれている「ウスバキトンボ」のことである。「先祖の霊がトンボに姿を変えて帰ってきた」とか「霊の使い」とか言われているが、作者の生まれ育った地方では、茄子や胡瓜と同じように、御霊が乗って帰ってくると言われているのだろう。亡き母を待っているやさしさに心が動かされた。

ときめきも時にはありぬ更衣　隠木登美子

更衣のとき、若い頃に着ていた服が出てきて、心がときめいたのだ。その服をよく着ていたころの、思い出や感情が蘇ってきたのだろう。

絵手紙の余白の重み半夏生　濱本美紀恵

絵手紙教室では、先ず「下手でいい。失敗を気にせず、自分らしさを大切にしましょう」と教わるようだ。自分らしさで描いた絵手紙は、真心の贈り物でもあり、余白にも喜んでもらいたいという、気持ちが詰っているように思う。

海の家解かれて波の静かなり　石嶋みつ子

海の家も解かれ、人もいなくなった秋の浜辺。清涼感に満ちた秋の浜辺で、夏の思い出に浸っている作者の顔が目に浮かんでくる。

広島忌二十五言語の「はだしのゲン」　瀬戸内かんな

二十五か国の言語に訳されて、子どもたちに読まれている漫画「はだしのゲン」。多くの支持を得ている、この漫画が、平和教育教材から外されたことに、作者も疑問を抱いているのではないだろうか。

いつもより濃い紅をさし牡丹園　廣津　敦子

「百花の王」と呼ばれ、大輪で豪華絢爛な牡丹の花に負けないようにと、少し濃いめに紅をさした作者。特別な人と行くのか、何かの記念日なのかなどと、想像が広がる。

熱燗やいつもの四人指定席　橋本　収三

この四人は、居酒屋で親しくなった人たちなのだろう。楽しめることを見つけ、心身の健康を保ち、気の合う仲間と過ごしていきたいものだ。

極月の達磨未だに片目なり　櫻田　文雄

達磨の目入れは、願いや目標の叶った後「願成就」を表す大切な儀式なのだが、この達磨は十二月になってもまだ片目のままである。作者の不安や焦燥感が伝わってくる。

夾竹桃供花のごとく咲きにけり　山根可寿志

現在も、世界のあちらこちらで紛争が続き、多くの人や子どもたちが犠牲になっている。そんな現状に心を痛めている作者には、原爆投下後にいち早く咲き、復興の象徴とされている夾竹桃が供花のように感じられたのだろう。

はやばやと笑顔の集ふ敬老日　森藤日出美

外出が少なくなった高齢者。敬老会で久々に知り合いと会うことが嬉しくて、皆早めに集まったのだ。まずは病気自慢、そして近況や思い出話に花が咲き、楽しい一日だったようだ。

かなかなの声を背に受け宿題す　島　知子

夏休みも終わるころ、宿題がたくさん残っていることにやっと気付いた子ども。「なぜもっと早く始めないの」ともどかしさを感じながらも、かなかなの声に励まされ、懸命に頑張っている我が子の後姿が愛おしい作者なのだ。